

日本声楽発声学会

The Japan Association for Research in Singing

学会通信

2014年10月26日 第29号

会員のみなさまへ

会長 末芳枝

2014年ノーベル物理学賞は、青色発光ダイオード(LED)の開発で三人の日本人が受賞しました。(10月7日決定)素晴らしいことです。一方、気象状態は悪く、台風18号、19号が日本列島を通過し、被害をもたらしました。また、御嶽山の噴火が9月27日にあり、戦後最悪の火山災害となりました。



会員の皆様には、いかがお過ごしでいらっしゃいますか。寒暖の差が激しい季節ですので、ご自愛下さいますようお願い致します。

本年は東京オリンピック開催から50年、東海道新幹線開業50周年、日本声楽発声学会も発声指導法研究会として設立50周年という記念すべき年で、国家としての大事業と時を同じくしているのです。国民全体の活気に満ちた時代的背景の中で、当学会の先輩方の意欲を強く感じます。

現在、多くの声楽家が育ち、海外で歌い、成功して居ります。半世紀に亘る当発声学会の活動も大きく貢献していると思われまふ。これから一層内容の充実を図り、声楽界に貢献したいと考えて居ります。

会員の皆様、学会発展の為、そして皆様のご要望に応えられるよう努力致して参りますので、ご意見ご希望を事務局へお寄せ下さい。

当学会設立50周年記念演奏会は、柴田南雄作品「宇宙について」の四合唱団(約80名)のコンサートとなりました。演奏部淡野弓子理事(総合指揮)を中心として、永原恵三会員、市瀬寿子会員の指導する合唱団が一体となって大曲を語り、歌いあげました。それは宇宙に存在する人間の営みの声であり訴えであり祈りとなりました。歴史的時代を越え、国を越え、宗派を超えた神への祈りと、喜怒哀楽の人間の全ての感情が表出されて居りました。作品を通して、われわれ聴衆は宇宙を見つめ、過去・現在・未来を見つめつつ聴き入りました。

人工衛星、宇宙ステーション、長期宇宙滞在が可能となった現代も、地球上での人間の営みの声は変わっていないと痛感いたしました。見事な演奏会でした。淡野弓子理事、永原恵三会員、市瀬寿子会員、優れたご指導と指揮をありがとうございました。また、歌って参加されました川上勝功副会長、山本富美理事にも感謝を申し上げたいと思

います。有難うございました。合唱団の皆様も本当にご苦労さまでした。心をつとめた立派な演奏会でした。

第100回例会は、11月29日(土)午後1時より、沖縄県立芸術大学で開催されます。皆様のご参加をお待ち致しております。

50周年記念演奏会報告

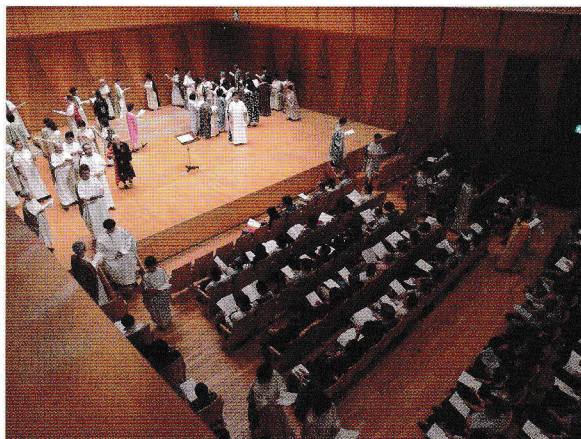
日本声楽発声学会創立50周年記念演奏会
「歌の集い」[9] 柴田南雄《宇宙について》
2014年9月15日(月・祝) 15:00~18:00
三鷹市芸術文化センター「風のホール」

《宇宙について》報告

多くの人が参加出来、演奏曲目を通じて考え、目を開かれ、共に喜べる作品を、ということで柴田南雄作曲《宇宙について》(1979)の上演が決まったのは今年の3月でした。参加団体はアンサンブル・アクアリウス、国分寺チェンバークワイア、コール淡水・東京、H.シュッツ合唱団・東京の4合唱団、さらに発声学会からは川上勝功、山本富美両理事が特別参加して下さり、熱気に溢れた合同練習を経て当日を迎えました。

この作品に用いられている音楽形式はグレゴリウス聖歌から中世、ルネサンス、バロックを経て12音、無調まで、テキストは各地の創世神話、旧約聖書、靈的修練書からの言葉、そして西洋から伝来し400年余の口伝を経て今も唱えられている「おらっしゃ」、さらに華嚴経までが網羅され、演奏には体力のみならず相当の知力と素養を問われる作品でした。

曲の中心部でラテン語とほぼ同時に日本語でも歌われるニコラウス・クザーヌスの「Minimum maximo coincidit 最小と最大は一致する。coincidentia oppositorum 神は反対の一致。」との言葉の意味をいろいろな場面で感じながら、およそ80名の歌い手が舞台上で、2階のバルコニーで、またある時は客席にまで下りていって歌い踊った時間は、大袈裟な表現かもしれませんが、此の世にありながら彼の世を垣間見るような不思議な時空を表出していたように思います。



柴田南雄夫人でテキストの選択・編纂をなさった純子先生もお見えになり、とてもお喜びでした。また音楽学の金澤正剛先生、正木光江先生、元NHKのディレクター大塚修造氏、当学会会長末先生、副会長（事務局局長兼任）小川先生、事務局次長永井先生、そして監事の清水喜承先生はじめ多くの学会員の皆様、各合唱団員の友人、知人、また以前に《宇宙について》を歌ったことのある方々などおよそ300名（当日売40枚とのこと）のお客様をお迎えし、歿後18年になられる柴田先生と《宇宙》の人気は一向に衰えていないことを知らされました。

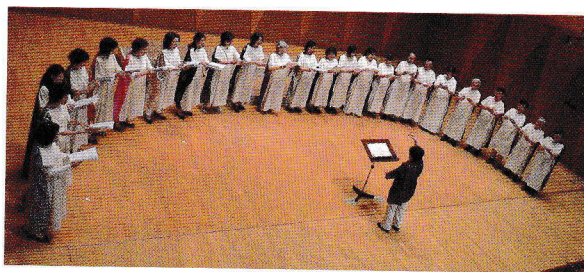
最後になりましたが、指揮者永原、市瀬両先生、歌って下さった合唱団の皆様、受付、録音、撮影ほかお手伝い下さいました皆様に心からの感謝を捧げます。

アンサンブル・アクアリウス/H.シュッツ合唱団
指揮者 淡野弓子

★当日のプログラムに残部がございます。ご希望の方は、FAX：03-3998-5238
またはE-Mail：yumiko@musicapoetica.jp 宛、お名前、ご住所とともに申し込み下さい。

《宇宙について》に出演して

記念演奏会「歌の集い」〔9〕は、大変な感動と喜びの中に幕を閉じた。熱心な聴衆とやる気満々の4つの合唱団とが、終曲に近づくにつれ、一つになったのだ。あらゆる可能性を人間の声のみで試みられた柴田南雄先生の《宇宙について》は、初演から35年たった現在も新たに聴く者、歌う者に多くのメッセージを伝えた。歌う者にとってはもう一度自分の声を根本から耕しなおし、再発見する



という体験をさせて頂いた。

私共、国分寺チェンバークワイアは旧約聖書の言葉が古典派・ロマン派の手法で書かれた第3楽章を歌った。自然倍音の中の声の出し方から始まり、第4楽章から3つの合唱団と合体し、その渦の中でインドネシアのガムラン、エチオピアコプト教会の祈りの歌など歌い進んでゆくうちに、急速に、体も声も解放されてゆくのを感じた。歌い手が一つになり、終曲の華厳経を唱え終り、会場の聴衆の大共感の大拍手を頂いた時は、心より解き放たれた喜びを感じた。

各自創意を凝らした衣装、ホール全体を使った演出効果も相まって、感動のステージであった。

このようなステージで演奏する機会を与えて下さった発声学会の皆様、団員一同心より感謝を申し上げます。

国分寺チェンバークワイア 主宰・指揮 市瀬寿子



今回の企画に、男声合唱団「コール淡水・東京」の皆さまと共に参加できましたこと、大きな喜びでありました。《宇宙について》という柴田南雄の記念碑的作品はやはり学会創立50周年という大きな節目に相応しかったと思います。

第二章の無調、十二音風の音楽は、いぶし銀のごとく、現代音楽の作曲家としての柴田南雄を浮き彫りにし、練習の回を重ねるごとに、その深さに近づくことを感じました。

第4章以下のシァターピースに至り、会場の聴衆と演奏者が一体となった祈りの空間になったことが、聴いてくださった多くの方々からの声からもわかりました。すばらしい祝祭の時であったと思います。

「コール淡水・東京」 指揮 永原恵三

「宇宙について」の演奏に参加して

純正調のヨーロッパ音楽に馴れていた仲間の中には「宇宙について」の練習が始まって暫くの間、とまどいを感じた人がかなりいたようです。

私はといえば、以前から神道や仏教に親和感を抱き祝詞や読経、声明にたくまざるハーモニーが生まれることに感動を覚えていたので、今回の演奏がどのようなものに仕上がるのか、とても楽しみでした。

結果は何人かの聴き手の感想にもあったように、素晴らしいものでした。第四章のさまざまに雑音を発する部分は思いっきり発声したので、思わず魂が解放されたかを感じましたし、第五章、第六章は人の声の重なりが持つ凄さと音楽の多様性を実感しました。とまどっていた仲間も華厳経まで来て美しいと感じたようです。最後の第一章八小節は素直に感動しました。

国分寺チェンバークワイア 団員 佐々木恭之助



ベルカントを巡る

No4 「ベルカントの口頭伝承から理論化へ」

河合孝夫

我々が研究するところのベルカントは、ヨーロッパを発祥の地とするいわば論理性を持つ高度な伝承音楽の面を持つ。留学して学ぶのは、かの地の文化と技術の伝承性の中に身を置き、我が国とは異なる観点から研究する事に大きな目的があるのではなからうか。また、ヨーロッパの音楽家を招きレッスンを受けるのも同じ意味合いを持っており、彼らもレッスンの中でしばしば伝承性に関する内容に触れる。それは、我が国に限らず他のアジアの国々やアメリカにおいても同じであり、それ故ヨーロッパを本場とするのであろう。



ところで、伝承には熟練者から弟子に口移しのよう技術を伝える口頭伝承の形と、口頭だけでなく論理性と文章を伴う近代的な伝承のふた通りの形態がある。今回は、今日のように楽譜も無く録音技術もない時代、中世ヨーロッパにおいて正統的グレゴリオ聖歌の歌い方（つまりベルカントの源流）が、どのように伝承され、また、理論化されていったのかを考えてみたい。

6世紀末グレゴリウス1世から9世紀前半カール大帝の時代にかけて、ローマ法皇はヨーロッパ各地でばらばらに行われていた典礼と聖歌を中央集権的に整理した。この時、整理集約されたものが今日グレゴリオ聖歌と呼ばれるものである。

そのころ、グレゴリウス1世が制度化したスコラ・カントルムと呼ばれるローマで聖歌を歌うために訓練された特別の聖歌隊があった。この名前は聖歌学校と同じ名前であるが、それほど重要であったので同じ名前と呼ばれた。それは、第1歌手から第7歌手までの7人でできており、第1から第3までの歌手は典礼の中で独唱も歌い、第4歌手はアルキパラフォニスタといい第一副唱者として歌い、第5から第7歌手はパラフォニスタといい副唱者として歌った。第一副唱者と副唱者は合唱のみを受け持ち、いわゆる平行オルガヌムの時代、アルキパラフォニスタは主旋律に対して平行4度の音程で歌うので4度歌手、パラフォニスタは主旋律に対して平行5度の音程で歌うので5度歌手と呼ばれた。また、少年が平行8度で響きを補強することもあった。

このスコラ・カントルムという聖歌隊は複数あり、ヨーロッパ中に派遣され各地で歌うとともに

グレゴリオ聖歌の歌唱法を指導した。そして、それを模範にしてヨーロッパ各地に聖歌学校が作られた。

このように、この時代は口頭伝承により聖歌と聖歌の歌唱法を統一、保持したのである。

ところが、11世紀にグイド・ダレッツォという音楽家が現れた。彼は、読み方の難しかったネウマ譜を4線上の楽譜に移し、アルファベットで音の高さを表した。そのことにより、以前は指導の必要だった聖歌が簡単に楽譜を見て歌えるようになり、ローマの聖歌隊の指導が無くてもグレゴリオ聖歌を歌えるようになった。また、彼はドレミで相対的に音の高さを覚える方法を発明して少年達を教育し、指導法を論理的にした。

興味深い事に、彼は、発声についても言及している。『声はミックスされなければならない。音は流れるように次の音に移行するのであって、次の音が新たにおかれてはならない。』補足して言い換えると、声には胸声と頭声があり、ふたつの声をミックスする事で歌唱をなめらかにし、フレーズを流れるように歌うべきであると言っている。これは現代のベルカントの技法に通じる表現ではなからうか。

13世紀には、ジョヴァンニ・ダ・ガルランディアが「胸声と頭声に」触れており、モラヴィアのヒエロニムスは『聖歌においては、異なる声は、胸声と頭声であっても喉声と頭声であっても、混合して使用してはならない。通常、低声つまりバスは胸声で、高声は頭声であり、その中間にあるのが喉声（中声）である。これらの声は、聖歌の中で一緒に使用するのでなく、それぞれ別に使われなくてはならない。』これは、合唱における声部の声の使い分けについていっていると思われる。

*以上『内はE・ヘフリガー著 小倉和子訳「Die Singstimme」からの引用文である。

この3人の言うところの「胸声」「頭声」とは男声における「地声」「裏声」に対応する声の事であり、喉声（中声）まで含めると現代の3声区説に通じる概念がすでにあつた事になる。

このように、ローマのスコラ・カントルムに始まったベルカントは、口頭伝承からしだいに理論化され、論理的な歌唱法として時代を受け継がれて来たと考えられる。（2014年10月投稿）



会員の動向

～～ コンサート案内 ～～

泉 恵得 六大歌曲集連続演奏会

- 1 シューベルト「美しき水車小屋の娘」
日時：2014年11月3日(祝)午後3:30～
ホール：島ピアノセンター(沖縄市)
ピアノ：多和田あゆみ
- 2 シューベルト「冬の旅」
日時：2015年1月11日(祝)午後7:00～
ホール：パレット市民劇場(那覇市)
ピアノ：中山孝史
- 3 シューベルト「冬の旅」
日時：2015年2月26日(木)午後7:00～
ホール：沖縄市民劇場「あしびなー」
ピアノ：中山孝史
- 4 シューベルト「白鳥の歌」
日時：2015年4月
ホール：未定
ピアノ：下門健吾
- 5 シューベルト「冬の旅」
日時：2015年5月
ホール：サロン フォンティエヌ(沖縄市)
ピアノ：安富祖貴子
- 6 信時潔「沙羅」
日時：2015年6月
ホール：浦添市でだこ大ホール
ピアノ：眞喜志麻紀
- 主催：沖縄日伊オペラ 共催：沖縄日伊協会
後援：琉球新報社、沖縄タイムズ、日本声楽発声学会
入場料：0円～3000円
お問い合わせ：080-2791-3545/098-931-0373
プレイガイド：リウボウ、島ピアノ、普及原楽器

事務局から

お詫びと訂正

学会通信第28号P4第100回例会項目5
米山先生の紹介が名誉会員となっていますが、正
しくは顧問です。

お詫びして訂正いたします。

会費納入のお願い

年会費の納入がお済みでない方、納入をお願い
します。また、過年度の年会費未納の方は早急にお振込
下さいませよう、お願いいたします。通信欄には、該当年度
をご記入下さい。

お振込先

ゆうちょ銀行
口座番号 00170-0-119920
加入者名 日本声楽発声学会

沖縄への移動手段と宿泊について

過去の学会通信に掲載の案内を参考に、各自旅行社等で手配して下さい。現地集合、現地解散です。すでに手配した人の話を聞きますと、往復の飛行機と1泊の宿泊で5万円前後で予約をした人が多いようです。ご参考まで。

会場：沖縄県立芸術大学 奏楽堂

首里当蔵キャンパス

〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町1-4

TEL：098-882-5000 (代表)

空港から会場(首里当蔵キャンパス)までの交通

【タクシー等自動車利用の場合】

那覇空港(那覇)より9.8km、約45分。

沖縄自動車道・那覇I.C.から約10分。

【モノレール利用の場合】

那覇空港駅より首里駅まで約35分。

首里駅より徒歩約10分。

【バス利用の場合】

「当蔵」バス停車、徒歩1分。

那覇バス系統番号

[1]首里牧志線 / [17]石嶺(開南)線 /

[46]糸満西原線 / [14]牧志開南循環線

沖縄バス系統番号

[8]首里城下町線

大学HPの交通案内

<http://www.okigei.ac.jp/access/index.html>

編集後記

幹事 相川 修一

今回は、記念演奏会の報告を中心にまとめてみました。紙面の制約がなければ、もっと大きな写真でお伝えしたかったのですが、今回は4ページ構成のため、叶いませんでした。次号は8ページ構成の予定です。みなさんのご投稿、情報等お待ちしております。



2014年11月26日

日本声楽発声学会 学会通信 第29号

発行人 末 芳枝

編集人 相川 修一

発行 日本声楽発声学会事務局

〒241-0002 神奈川県横浜市

旭区上白根1-5-552 小関 方

TEL/FAX 045-952-3813

e-mail :jars@jars-voice.com

HP: <http://www.jars-voice.com>